

報 告

サポートファイルの活用と普及への
課題と対応に関する一考察

～ A市の保健センター, 療育機関, 特別支援学校が連携した取り組みから～

井上和久^{1,2)}

〔論文要旨〕

特別支援学校, 保健センター, 療育機関が協働して作成したサポートファイルの活用状況と問題点を明らかにするため, 保育所, 幼稚園, 小学校, 中学校を対象に調査を実施した。調査結果から, 半数以上の学校園でサポートファイルを活用していないという実態が明らかになった。サポートファイルを活用している学校園では, 子どもの情報共有や保護者との関係づくりに効果があることが示された。サポートファイルを持っている保護者の把握, 学校園と保護者の間にサポートファイルを提示する流れ, サポートファイルの必要性の認識, ファイルの利用の仕方の理解等の問題が明らかになり, サポートファイル普及への取り組みの方向性が示唆された。

Key words : 早期支援, サポートファイル, 連携, 特別支援学校

I. はじめに

発達障害のある子どもは, 早期から発達段階に応じた一貫した支援を行っていくことが重要であり¹⁾, そのためには, 保護者相談の充実, 療育の充実, 保育所・幼稚園での支援の充実等, 子ども・保護者を支える体制の整備が必要である。

早期からの支援について, 渥美らは, 発達障害等の子どもへ生涯にわたり一貫性のある支援を実現するためには, 親子が歩んできた歴史を十分に踏まえることが肝要であるが, それぞれの機関が別々の情報を持っており, それらが集約できないことが多いと述べている²⁾。そして, 笹森らは, 障害の発見から支援に関する情報に関しては, 個人情報に十分配慮されたうえで, 相談支援ファイルのようなツールを活用することで, 保健, 福祉, 医療, 教育等の関係機関に共有化され, 継続的, 総合的に支援がなされるように保障されな

ければならないと述べている¹⁾。これらのことから, 適切な支援の継続のためには, 保護者や関係機関が情報を共有できるためのツールが必要であり, 相談支援のための手帳やファイル(以後, サポートファイルと称する)がその一つとして考えられる。

サポートファイルは, 文部科学省・厚生労働省が作成を推奨し, 県や市町村の福祉関係機関や教育委員会が中心になり普及が進められており, 各市町村が独自の名称を使用し, 独自の様式を作成して配布を進めている。城間らの研究では, 障害のある子どもの乳幼児から学校卒業まで, 生涯を通じて活用できるツールとして, サポートノート「えいぶる」のプロトタイプ作成を行った³⁾。また, 清水らがサポートノート「えいぶる」試用者に行った調査では, 試用した保護者の7割がサポートノートを「必要あるもの」, 「使いたいもの」と考えていた⁴⁾。サポートファイルが効果的に活用されるためには, その存在を周知されていることが

A Thought on the Subject and Response to the Use and Spread of the Support File : From Collaboration between the Health Centers, Rehabilitation Schools and Special Support Schools in City A

Kazuhisa INOUE

1) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

2) 兵庫県立赤穂特別支援学校(教諭)

別刷請求先: 井上和久 〒671-2103 兵庫県姫路市夢前町前之庄1916-1

Tel/Fax : 079-336-1795

〔2439〕

受付 12. 5.30

採用 12.11. 7

重要であり、特別な支援が必要な子どもに適切な配慮や支援を行うべき保育所、幼稚園、小学校、中学校（以後、学校園と称する）での周知は特に重要である。しかし、学校園でのサポートファイルの活用状況や問題点について調査・検討した研究は見られない。そのため、本研究では、特別な支援が必要な幼児の早期発見から早期支援への円滑な移行のため、保健センター、療育機関、特別支援学校が協働して作成したサポートファイルが、学校園でどのように活用されているのかを調査し、その有用性と普及への課題、対応策について検討を行うこととした。

II. 方 法

1. A市サポートファイルについて

i. A市の早期支援の状況とサポートファイル作成の組織

A市は、人口約5万人で、従来から乳幼児健康診査や健診後のフォローは保健センターが行っていた。療育機関としては、児童発達支援事業「B園」（以後、療育機関と称する）が設置されていた。市内にはC特別支援学校（以後、特別支援学校と称する）が相談室を平成18年に設置し、筆者を含む心理士・言語聴覚士等の資格のある2名の特別支援教育コーディネーターが、早期からの教育相談、学校園へのコンサルテーション等の地域支援を行っていた。しかし、3つの機関の連携は希薄で、保健センターに心理職が配置されておらず、必要な幼児へ早期に相談支援を開始しにくい状況があった。そのため、早期からの支援の充実を図るため、特別支援学校の呼び掛けにより、保健センター、療育機関、特別支援学校の3つの機関による「特別な支援が必要な子どもの早期支援に係る連絡会」（以後、連絡会と称する）を設置した。連絡会は各機関長（特別支援学校長、保健センター所長、療育機関責任者）、特別支援学校コーディネーター2名、保健センター保健師2名、療育機関職員2名の9名で構成した。平成21年度（6回開催）には、関係機関が連携した早期からの支援システムの構築への検討を行った。そして、平成22年度は、支援の継続のツールとしてサポートファイル作成を行うこととした。そのため、協議の場として、サポートファイル検討委員会を設置した（構成員：社会福祉課・教育委員会・保健センター・療育機関の各機関担当者、特別支援教育担当学校園所長、学校園の代表コーディネーター、特別支援学校のコーディネーター）。

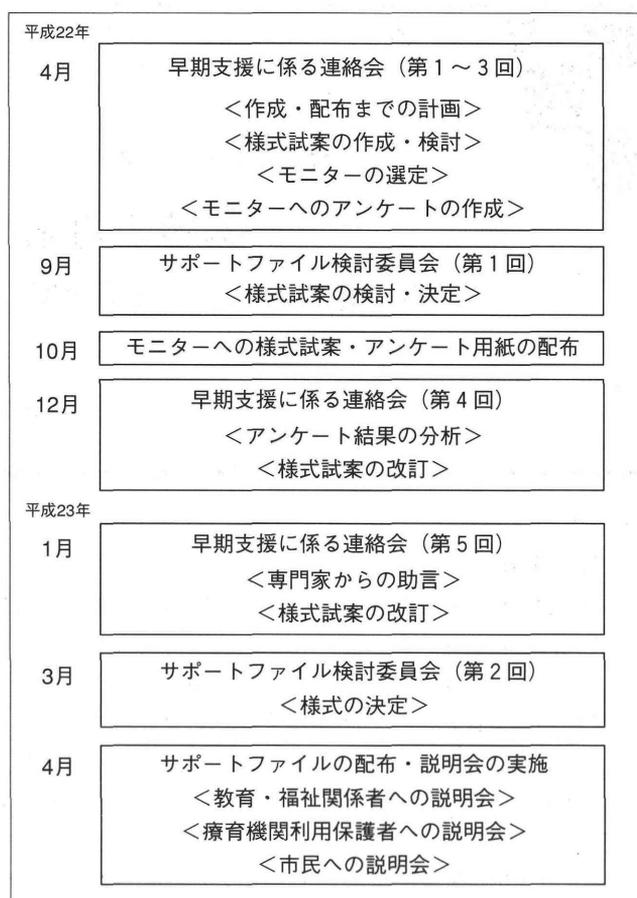


図1 サポートファイル作成のプロセス

ii. サポートファイルの様式決定・配布までのプロセス

サポートファイル作成までの流れを、図1に示した。平成22年4月から作成のための取り組みを開始した。連絡会においてサポートファイルの様式決定・配布までの計画を行うとともに、様式試案の検討、モニター（保護者）の選定、質問紙の作成を行った。同年9月、サポートファイル検討委員会で様式試案の検討、10月、幼児から中学生までの保護者13人に様式試案に実際に記入してもらい質問紙調査を実施、その結果を基に様式試案の改訂を行った。その後、発達障害者支援センター職員による助言、サポートファイル検討委員会での協議を経て、平成23年3月に様式を決定した。

サポートファイルを配布する対象者は、特別な配慮・支援が必要な本人またはその保護者等とし、希望者への配布を原則とした。一方、療育機関では、早期からの支援の充実を図るため、サポートファイルの意義を説明し、全利用者（保護者）へ配布を行うこととした。同年4月から、連絡会担当者が、教育・福祉関係者、保護者、市民への説明会を行い、現地で希望者へ配布した。また、特別支援学校、療育機関、市の社会福祉課でも配布できるように窓口を設置した。その結果、

フェイスシート (氏名住所等, 家族構成, 本人の状態, 診断, 障害者手帳など)
成育歴, 所属歴
医療情報 (基礎疾患, 医療機関, 飲んでいる薬など)(受診の際の配慮)
相談の記録
生活習慣 (睡眠・歯磨き・入浴・食事・排泄, 衣服の脱ぎ着・運動・遊び)
好み, 特性などについて (好きなもの・嫌いなもの, 得意なこと・苦手なこと) (感覚過敏, こだわり, パニック)
コミュニケーション (ことばの理解, 表現の様子, コミュニケーション方法など) (他者との関わり方, 集団での様子)

図2 サポートファイルの内容

平成24年2月末までに3～16歳までの子どもの保護者約100名に提供した。

iii. サポートファイルの内容

サポートファイルの内容を図2に示した。氏名, 住所, 家族構成, 診断名等の欄からなるフェイスシート, 医療情報, 成育歴, 所属歴, 生活習慣, 本人の特性, コミュニケーション, 医療的な管理・処置等, 15項目26ページで構成している。それぞれの項目の先頭ページには記入年月日の記載欄を設けている。成育歴, 所属歴, 相談の記録等については記録を書き加えていく欄を設け, 生活習慣, 本人の特性, コミュニケーション等の項目については, 学年記載欄を設け, 毎年書き換える様式とした。

2. 学校園への質問紙調査

i. 調査対象

A市の全ての公立保育所, 公立・私立幼稚園, 公立小学校・中学校を対象にした。調査の対象は, 32か所(保育所6, 幼稚園11, 小学校10, 中学校5)であった。

ii. 調査期間および調査手続き

本調査の調査期間は, 平成24年2月下旬～3月下旬であった。郵送法による質問紙調査を実施した。学校名・記入者名は無記名で行い, 返信用封筒を同封し回収した。

iii. 回収数と回収率

回収数は27か所(保育所4, 幼稚園9, 小学校10, 中学校4)で, 回収率は84.4%であった。調査対象の

学校園の数が少なく, 校種による回答内容が異なる傾向が見られなかったため, 本研究では, 学校園をまとめた群として分析を行った。

iv. 質問紙調査の内容と整理の仕方

調査は次の内容で構成した。

- ①「サポートファイルを持っている保護者はいますか」(3件法)
- ②「あなたの学校園ではサポートファイルを利用していますか」(4件法)
- ③「サポートファイルを利用してよかったところはどこですか」(②の質問で「よく利用している」, 「利用している」を選択したものが回答する。選択肢<複数回答可>とその他の自由記述欄あり)
- ④「利用しにくかったところはどこですか」(②の質問で「あまり利用していない」, 「利用していない」を選択したものが回答する。選択肢<複数回答可>とその他の自由記述欄あり)
- ⑤「サポートファイルを普及し活用してもらうために, 今後必要と思われることはなんですか」(選択肢<複数回答可>とその他の自由記述欄あり)

各項目結果については, 数と割合を表に示し, 分析・検討を行った。自由記述の結果については, 回答の内容をキーワードにして分類した。

v. 回答者

質問紙調査の記入者は管理職が4人, 特別支援教育コーディネーターが20人, 特別支援学級の担任が1人, 未記入が2人であった。

III. 結 果

1. サポートファイルの利用状況および有用性, 課題について

「サポートファイルを持っている保護者はいますか」の問いに対して, 「いる」と回答した学校園が15校園(55.6%)あった。「いない」の回答が9校園(33.3%)あり, 「把握していない」の回答が3校園(11.1%)あった。

「あなたの学校園ではサポートファイルを利用していますか」の問いに対して, 「よく利用している」と回答した学校園は0校園で, 「利用している」と回答した学校園は3校園(11.1%)であった。「あまり利用していない」の回答が10校園(37.0%)あり, 「利用していない」と回答した学校園が14校園(51.9%)あった。

表1 「サポートファイルを利用してよかったところはどこですか」の問いに対する回答

項目別に記載されているので、必要な情報をすぐに知ることができた	3 (11.1%)
子どもの発達等の状況が詳しくわかった	2 (7.4%)
保護者と子どもについて話し合いがしやすくなった	2 (7.4%)
関係機関からの情報が入りやすくなった	1 (3.7%)
保護者からの提供(複写)により、資料として残しておけた	1 (3.7%)
就園前に見せてもらうことにより、就園に向けての準備ができた	1 (3.7%)

表2 「利用しにくかったところはどこですか」の問いに対する回答

ファイルについて、保護者からの相談や提示がなかった	13 (48.1%)
ファイルを持っている保護者の把握ができなかった	6 (22.2%)
必要なことは保護者や関係者と話し合うので必要を感じなかった	6 (22.2%)
ファイルの利用の仕方がわからなかった	5 (18.5%)
保護者も学校園も、ファイルのことについて十分知る機会がなかった	4 (14.8%)
支援が必要な子どもでファイルを持っていない保護者がいた	4 (14.8%)
保護者にファイルをいつ提示してもらえばいいのかわからなかった	4 (14.8%)
対象児がいなかった	4 (14.8%)
病院の診断書、個別の支援計画、サポートプランなど既存の資料で十分に対応できる	3 (11.1%)
ページ数(内容量)が多く、利用しにくかった	3 (11.1%)
学校園で支援をするうえで必要でない情報が多かった	2 (7.4%)

表3 「サポートファイルを普及し活用してもらうために今後必要と思われることはなんですか」に対する回答

保護者への書き方講習会の実施	17 (63.0%)
教員等への説明会の実施	17 (63.0%)
サポートファイルについての相談窓口の設置	10 (37.0%)
園や学校への巡回による書き方等の相談の実施	8 (29.6%)
園や学校でのサポートファイルの記入を支援する担当者の指名	6 (22.2%)
広報等による理解・啓発	6 (22.2%)
市民向け説明会の実施	4 (14.8%)
医療等関係機関向けのリーフレットの作成・配布	3 (11.1%)

「サポートファイルを利用してよかったところはどこですか(複数回答可)」の問いに対する回答結果を表1に示した。「項目別に記載されているので、必要な情報をすぐに知ることができた」の回答が3校園(11.1%)、「子どもの発達等の状況が詳しくわかった」が2校園(7.4%)、「関係機関からの情報が入りやす

くなった」1校園(3.7%)であり、子どもの情報収集に関する内容がのべ6校園からあった。「保護者と子どもについて話し合いがしやすくなった」の回答が2校園(7.4%)あり、「就園前に見せてもらうことにより、就園に向けての準備ができた」の回答が1校園(3.7%)からあった。

「利用しにくかったところはどこですか（複数回答可）」の問いに対する回答結果を表2に示した。「ファイルについて、保護者からの相談や提示がなかった」の回答が13校園（48.1%）からあった。「ファイルを持っている保護者の把握ができなかった」が6校園（22.2%）、「保護者も学校園も、ファイルについて十分知る機会がなかった」が4校園（14.8%）あり、「ファイルの利用の仕方がわからなかった」5校園（18.5%）、「保護者にファイルをいつ提示してもらえばいいのかわからなかった」4校園（14.8%）を加えると「サポートファイルに関する情報提供の問題」による利用のしにくさの回答がのべ19校園からあった。「必要なことは保護者や関係者と話し合うので必要を感じなかった」の回答が6校園（22.2%）、「病院の診断書、個別の支援計画、サポートプランなど既存の資料で十分対応できる」が3校園（11.1%）、「学校園で支援をするうえで必要でない情報が多かった」が2校園（7.4%）あり、「サポートプランの必要性の低さ」に関する内容がのべ11校園からあった。「ページ数（内容量）が多く、利用しにくかった」というサポートプランの様式に関する内容が3校園（11.1%）からあった。「支援が必要な子どもでファイルを持っていない保護者がいた」の「サポートファイル配布に関する問題」が4校園（14.8%）からあった。

2. サポートファイルの普及と活用のための方法

「サポートファイルを普及し活用してもらうために、今後必要と思われることはなんですか（複数回答可）」に対する回答結果を表3に示した。「保護者への書き方講習会の実施」が17校園（63.0%）、「教員等への説明会の実施」が17校園（63.0%）あり、説明会・講習会の実施に関する回答が多かった。「サポートファイルについての相談窓口の設置」が10校園（37.0%）、「園や学校への巡回による書き方等の相談の実施」の回答が8校園（29.6%）、「園や学校でのサポートファイルの記入を支援する担当者の指名」の回答が6校園（22.2%）あり、サポートファイルを利用するにあたって相談や支援の必要性に関する内容が見られた。「広報等による理解・啓発」の回答が6校園（22.2%）、「医療等関係機関向けのリーフレットの作成・配布」の回答が3校園（11.1%）からあった。

IV. 考 察

1. 学校園におけるサポートファイル活用状況と普及への課題

本調査結果から、サポートファイルを利用している学校園は約1割であり、清水らの保護者対象の調査での「サポートノートに関係機関に持っていき情報を知ってもらうために使った」割合9%⁴⁾とほぼ一致した。

サポートファイルを活用している学校園からは「必要な情報をすぐに知ることができた」、「発達等の状況が詳しくわかった」、「関係機関からの情報が入りやすくなった」、「保護者との連携や就園に向けての準備に役立った」の回答があった。これらのことから、サポートファイルが、子どもの情報共有や保護者との関係づくりにも有用なツールになる可能性が示された。清水の調査結果においても、教育機関での活用する目的として「子どものことを知ってもらうため」が挙げられ、活用した保護者全員が「役立った」、「やや役立った」を選択していた⁴⁾。

一方、大半の学校園でサポートファイルが利用されなかったことが明らかになった。利用されなかった問題として次のことが挙げられる。

①サポートファイルが学校園に提示されていない

「保護者からの相談や提示がなかった」と回答した学校園が半数近くあった。「保護者にファイルをいつ提示してもらえばいいのかわからなかった」が約15%、「ファイルを持っている保護者の把握ができなかった」という回答が20%以上あった。これらの結果から、保護者から学校園にサポートファイルが繋がる流れができていないという問題が明らかになった。

②学校園の職員がサポートファイルの必要性を理解できていない

「必要なことは保護者や関係者と話し合うので必要を感じなかった」の回答が2割以上あり、「病院の診断書、個別の支援計画など既存の資料で十分対応できる」が1割以上あった。自由記述においても、「在園児については、必要な情報は保護者とその都度話し合っている」という内容があった。これらのことから、サポートファイル活用の意義や目的が、学校園に十分に理解されていないことが示された。

清水らが保護者対象に行った調査でも、「サポートノートを使う機会がない」とする意見が70%、「使う

必要がない」という意見が24%あった⁴⁾。学校園と保護者両方への働きかけが必要と考えられる。

③学校園がファイルの利用の仕方を十分に理解できていない

「ファイルの利用の仕方がわからなかった」が20%近くあった。学校園の担任等へのサポートファイルの説明が十分行われなかった可能性を示している。

④サポートファイルの存在を知らない学校園の職員や保護者がいる

「保護者も学校園も、ファイルについて十分知る機会がなかった」の回答が約15%あった。「特別支援学級の担任やコーディネーター以外の教員はサポートファイルの存在さえ知らないと思う」などの自由記述もあり、サポートファイルに関する情報が保護者や学校園の職員に十分に行きわたっていない可能性が示唆された。城間らは、サポートノート「えいぶる」について、関係するすべての機関や保護者への周知が図られることが前提であり、それなくしては活用されることはないと述べ、周知の必要性を挙げている³⁾。

⑤サポートファイルの様式の記入量が多い

「ページ数(内容量)が多く、利用しにくかった」という回答が約1割あった。「記入による負担が大きく、保護者や関係機関の負担にならないよう簡素化してほしい」などの自由記述もあった。サポートファイルの様式の内容量が多いと感じている教員や保護者がいることが示された。松井は、就学支援システムにおけるサポートファイルの様式作成を行い、スムーズな指導の活用のため、対象児の特徴が簡潔になおかつ要領よく描き出せるよう作成フォームの様式を工夫しなければならないと述べている⁵⁾。

2. サポートファイル普及のための取り組み

サポートファイル普及のためには、以下の4つの取り組みが考えられる。

①保護者から学校園にサポートファイルが繋がるルートづくり

保護者に対して、サポートファイルを学校園に提示する時期や方法を具体的に示した文書を提供することが考えられる。清水らは、配布時に活用の流れなどを示す参考資料を添付する工夫を行っている⁴⁾。また、サポートファイルを提供した保護者の名簿等を承諾の下で福祉等の機関から各学校園に提供することも考えられる。

②サポートファイルの存在と意義、活用方法を伝える

学校園への啓発として、教員等への説明会の実施や教員向けリーフレットの作成が考えられる。また園長会・校長会や教員研修会で、サポートファイルの必要性や意義、有用性について伝えることも考えられる。市民への対応としては、説明会やホームページ・広報での情報提供などが考えられる。清水はサポートノート活用の意味やメリットを自己の実感として感じられる仕組み、すなわち地域支援ネットワーク等の整備を早急に進めていく必要があると述べている⁴⁾。保護者や学校園がサポートファイルを活用してよかったと実感できるように、早期から支援ツールとして活用するシステムを構築することが求められる。

③保護者への支援

サポートファイルについての相談窓口の設置、学校園でのサポートファイル記入を支援する担当者の指名など、関係機関や学校園で、サポートファイルに関して気軽に相談できる場所や人を確保する取り組みが考えられる。また、連絡会の担当者が、学校園を巡回し、サポートファイルに関する保護者からの相談を受けることも考えられる。

④サポートファイルの様式等の改善

障害や発達の状態や配慮・支援の方法等、必要な情報を記入する欄の確保は必要である。対応として、保護者等が記入しやすくなる工夫が考えられる。例えば、子どもにとって必要な情報のみを記入すればよいということを説明文の最初に明記する「発作がある場合は〇〇ページに記入しましょう」のような文言を、吹き出しの形でガイドする等が考えられる。

3. まとめ

本研究では、サポートファイル活用の中心的な機関である学校園に対して調査を行い、その状況を明らかにし、課題と今後の対応について検討を行った。サポートファイルの様式作成と保護者への配布はスタートにすぎず、関係者にその意義を理解してもらい、学校園や保健・医療・福祉等関係機関で活用されてこそ、その役割を果たすことができる。本研究で得られた示唆は、1つの市の取り組みからのものである。今後は、多くの市町で作成されているサポートファイルの活用状況と課題等が検証され、有用性の高いサポートファイル様式と普及のための方法論の検討が求められる。

謝 辞

本研究に協力いただいた, 坂本千恵様, 岸本匡代様, 濱本亜希様, 中丁知子様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 笹森洋樹, 後上鐵夫, 久保山茂, 他. 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. 国立特別支援教育総合研究所紀要 2010; 37: 3-15.
- 2) 渥美義賢, 笹森洋樹, 梅田真理, 他. 障害のある子どもへの一貫した支援システムに関する研究—早期から社会参加に至る発達障害支援の確立と検証—, 発達障害支援グランドデザイン Ver.2 ~早期から後期中等教育以降に至る一貫した支援システムの構築—. 国立特別支援教育総合研究所専門研究 A 研究成果報告書. 2011.
- 3) 城間園子, 緒方茂樹. 特別支援教育における「とぎれのない支援システム」の構築—関係機関における情報交換ツールサポートノート「えいぶる」の作成—. 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 2011; 2: 1-11.
- 4) 清水祐子, 緒方茂樹. 特別支援教育における相談支援体制に関する方法論的研究—サポートノート「えいぶる」の試用を通して—. 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要 2011; 2: 13-23.
- 5) 松井剛太. 障害のある幼児の就学支援システムの構築—サポートファイルの活用による小学校への接続の試み—. 保育学研究 2007; 45 (2): 103-110.

〔Summary〕

In order to examine the practical use of and problems associated with the Support File, which was created through collaboration between special support schools, health centers and rehabilitation schools, we conducted a survey at preschools, elementary schools and junior high schools. The results of our survey revealed that the Support File was not used by more than half of the institutions surveyed. At the schools where the Support File was used, it was shown to be effective in sharing information relevant to children and relationship-building with their parents/guardians. Our survey identified various problems, such as managing the parents/guardians possessing the Support File; the presentation of the Support File to the schools and parents/guardians, and recognition of the Support File's need and understanding how to use it. Our findings suggest that an action plan needs to be established to further promote the use of the Support File.

〔Key words〕

early support, support file, collaboration, special support school